

## 「小論文」 問題用紙

問 次の文章を読み、要点をまとめたうえで、あなたが実際に体験したことで知識が深まったモノやコトについて具体的な例をあげながら、六〇〇字以内で述べなさい。

博物館では「ワークショップ」を行っていることがある。ワークショップでは、ふつうの展示のようにモノをみるだけではなく、実際に触る、動かす、身につける、つくるなどの体験ができる。これを通して、もっとモノのもつ意味や本質を、直接的に知ってもらおうという試みで、博物館の研究者が用意した体験展示なのだ。博物館の研究者が体験のために用意したものでなく、ときにはみなさん自身の力で新しい発見をするようにしつけられたワークショップもあるかもしれない。

二〇〇六年の秋から冬にかけて東京国立博物館平成館で「仏像 一木にこめられた祈り」という展示会が開催された。昔から人びとが木を大切に考えてきたことに重点を置き、その大切にしてきた木を材料にしてつくられた仏像を集めた展示会だった。そこで、この展示会開催にあわせて「一木彫ができるまで」というワークショップが行われた。ふたつのワークショップコーナーがデザインされたのだが、ひとつめは「どのようにして材木を彫って仏像をつくるのか、その過程を見てみよう」、ふたつめは「実際に木に触ってみよう」というくらいで企画されたものだった。

ひとつめのコーナーでは、東京藝術大学保存修復科の大学院生が、仏像のつくり方を四段階に分けて制作したものが展示された。①原木・墨描き「木から切り出して下書きをした状態」、②荒彫り「下書きにそっておおまかに彫った状態」、③中彫り「頭、胴、腕や足の形を彫り出した状態」、④小作り・仕上げ「仕上げ前の状態」の四段階をみることで、一木彫の仏像のつくり方と、それぞれの段階の高い技術を知ることができる展示だった。ふたつめのコーナー「一木彫の樹種」では、実際に仏像をつくるための材料の木に触ることができる。展示会で展示されている仏像は、どんな木でできているのか。使われているのと同じ種類の木の見本を実際に触りながら、やわらかさやかたさ、ざらざら、つるつるなどの肌触りや重さを確かめたり、それぞれに独特なおいをかいだりすることができるのだ。

この「材料を手で触ってみる」ということは、「彫刻」というものを知るためにはとても大切なことであり、あらゆる造形芸術をつくるための基礎でもあるのだ。

芸術はおいしい料理と同じだ。みなさんはテレビ番組で、おいしいレストラン特集や、料理番組をみたときに、それが本当においしいかどうかは、実際にそのレストランで食べたり、その料理をつくった経験がなければ

ばわからないはずだ。けれど、画面を通してその素材のよさがわかり、熱々のハンバーガーや職人がぎった極上寿司をみて、ぐっとつばをのみこまずにいられなかった経験があるだろう。それと同じことで、最高のモノをつくらうとした人たちは、太古の時代から「最高の材料」を選ぶことを、とても大切にしていたのだ。さらに、「最高の道具」を選ぶことも大切にしていた。美術館や博物館で絵画や彫刻、工芸品を鑑賞するということは、こうした「最高の材料」や「最高の技術」を味わうことと同じ意味があるのだ。

そもそもっと重要なのは、モノをみることで、それをつくり上げたであろう人びとと対話することなのである。それはどこにでもいるふつうのおじさん、おばさんだったかもしれない。工房でコツコツつくり上げる職人だったかもしれない。歴史に名を残した画家や彫刻家だったかもしれない。ワークショップに参加することによって、そうした人びとと、ただモノをみるだけでなくその材料に触れたりつくる過程を理解したりすることで、さらに深く対話することができるかもしれない。

美術の教科書の最初のページを思い出してほしい。人類最初の美術として、洞窟の奥に描かれた壁画や、土をこねて火で焼いてつくった土偶が出てくる。それらは、自分の手を使って土や血液を材料にして描いたり、土と水をこねて形をつくって火で焼かためたりして生み出されたモノたちだ。それらのモノたちをみると、つくった人たちの気持ちや祈りを想像することができるだろう。そして、もう少しページを進めると、筆やハケ、石や鉄などの道具を使つてつくられたモノたちが現れてくる。

博物館や美術館で、人類の長い歴史のなかで生み出されてきたモノに「触ってみる」、モノを「つくってみる」「使ってみる」ことができるワークショップの大切さがわかってもらえただろうか。大切なことは、教科書やインターネット上にあるのではない。実際に体験することにあるのだ。

注 一本の木から丸彫りされた彫刻のこと。

(出典 木下史青 『博物館へ行く』 岩波ジュニア新書五七一、二〇〇七年、一〇二〜一〇七頁による。以上の文章に記述の形式について最小限の手を加えた。)

令和6年度山口県立大学国際文化学部文化創造学科

外国人留学生選抜「小論文」出題意図

出典：木下 史青『博物館へ行こう』 岩波ジュニア新書 571、2007年、102～107頁より。以上の文章に記述の形式について最小限の手を加えた。

「一木彫」を事例としたワークショップについての著者の考えを正確に読み取り、要点を整理する力をみる（アドミッションポリシーの「技能」）。モノづくりや芸術についての知識や自身の見聞を用いながら（アドミッションポリシーの「知識」）、課題文を自分のものとして捉え直し、わかりやすく表現し、論理的に説明できるかを評価する（アドミッションポリシーの「思考力・判断力・表現力」）。